

た。その後、大きな河を渡った記憶がないから、泪水は第六師団の車に收容され寝たまま渡ったのかも知れない。

岳州に着いて中隊長以下全員戦死されたと聞いて茫然とした。あの時自爆すべきだったかと自問自答したが俺にはできなかったのだと自分に言い聞かせた。自分のように死に切れなかった者が、あとで何人か帰って来た。「戦死した戦友に申し訳ないが、お互い命があつて良かった」と抱き合つた。数日して軍法会議にかけると言われて事の重大さに改めて驚愕した。「菊の紋章の入った二八式歩兵銃を捨ててきた」というのが理由であつた。

影珠山に置き去りにしてきた山崎隊長はじめすべての戦友の遺体。せめて指一本でも持ち帰るのが戦場の習わしであるのに何一つできず、みんなうっちゃってきたのだ。大隊砲、重機、軽機、擲弾筒、小銃、夥しい武器全部置いて来たのである。軍法会議にはかけられなかったが、影珠山の死闘は、その後の私の人生に暗い蔭を今でも落としている。「陰珠山の生き残り」

と言いはやされても、山に残してきた戦友のことを思えばいい気持ちはしない。新聞では「天皇陛下万歳」と叫んで全員玉砕したと伝えられたが、そんなことを唱えて死んだ者は一人もいない。

やっぱり俺は生き延びて良かったと、何べんも何べんも自分に言い聞かせて今日に至っている。

広水の教育隊から応山の警備隊へ

愛知県 朝倉 博

私は昭和十八年四月の徴兵検査で甲種合格となり、歩兵十八番と書いた紙の札をもらいました。入隊は八カ月後の十二月二十日です。入隊先は新潟県の新発田市東部第二十三部隊（第四十二師団歩兵第一五八連隊第三中隊）でした。当時私は新潟県直江津の住友系の日本ステンレスの鋼材機械加工係として勤めていました。

私の家庭は複雑で、生母は離婚して私が長男、下に

四歳違いの弟と八歳違いの妹がおり、父は五十一歳でした。父は祖父が持ち山を売った金八万円で居食いついていましたが、私の入隊一週間前に急に後妻（四十一歳）をもらうことになり、産婆をやっていた義母が我が家に誕生したわけで、私も家事を任せる人ができなかったので安心して入隊できました。

当時の青年は青年学校に五年間通学して軍事教育を受けることになっていましたが、私は都合で二年半受けただけでした。

十二月二十日の前日、直江津からは三人が出発しました。新発田には約九百人の新兵が入隊しました。正月が明けた昭和二十年一月十日、客車十三両を連ねて下関に向け出発。行き先は第十三師団歩兵第一一六連隊要員として中支方面とのことで、福島、宮城、新潟の三県出身兵でした。

昭和二十年一月十三日、下関出帆、朝鮮に渡り大陸を南下、南京の大きな兵站で二十日間世話になり船で揚子江を安慶まで遡り九江に到着しました。ここで九百人が二手に分かれ、私ら三百人は第六十八師団独立

歩兵第一一五大隊に転属となり、残り六百人は第十三師団歩兵第一一六連隊に行きました。九江には転属先の部隊から中尉一人と伍長と上等兵三人ずつ計七人が迎えに来ていました。

九江で一週間休んだのち大隊本部のある湖北省陽新県大橋舖に向かい、船で漢口を経て石灰窟で下船、鉄道で大冶鉄山に着き、行軍で大隊本部に到着、一泊して三里離れた教育隊に入ったのが二月二十二日。内地を出てから四十日がたっていました。

教育隊では、独立歩兵第十一旅団編成要員教育のため現地召集された三十八歳から四十五歳までの人たちと、各部隊から転属になった三年兵が私たち三百人を待っていました。

早速、基本教育が始まり、軍人勅諭を覚えるまで三カ月かかり、軽機の基本動作などの速成教育を一カ月半受けて、三月十五日独立歩兵第十一旅団独立歩兵第二三三大隊に転属、第四中隊に編入となり陽新から九江まで行軍、九江から船で漢口まで行き鉄道で北上、湖北省応山県広水鎮の旅団に着いたのが四月二日でした。

た。直ちに第三師団と警備を交代し、終戦まで警備任務に就きました。

この第十一旅団は新設された警備専門の旅団で四個大隊で二十個中隊、一個中隊の人員は百人で全部で二千人の部隊でした。旅団長は宮下文夫少将（二十年四月一日、第一六〇師団長に転出）です。中隊長は寺の住職で四十歳の中尉でした。ほとんどの将校は予備役の甲幹出身で、陸士出身は一人もいませんでした。装備は悪く分捕った武器弾薬が半分でした。

昭和十九年五月から約二カ月は京漢作戦でした。重機関銃は分捕り品のチェコ水冷式で脚が重く銃身が軽く、弾丸は布製の弾薬に入っているのです、撃つ時は装弾板に移して撃ちました。私の兵科は歩兵ですが、足が甲高のダンピロのため、行軍は苦手で、毎日五、六里歩くのが精一杯でした。食料は白米、粉味噌は持っていましたが、野菜、肉は徴発。しかし、部落に入っても住民は逃げてだれもいません。恐らく近くの山に隠れたのだらうと思いました。たまたま入った家に赤ん坊が、ただ一人カゴに入れられていましたが、親は

どうしたのかわからずその後どうなったか知るよしもありません。

広水鎮あたりの土地は雨が降ると、ぬかるみとなり膝までダボダボと沈む赤土で、一旦乾くとタイヤの跡もそのまま固く乾くものですからとても歩きにくく、どうしようもなかったものです。行軍中の大小便は兵隊言葉で小便三町、糞八町と言われました。三年兵は歩きながら小便をしていました。

配属輜重部隊や砲部隊の馬はぬかるみに脚を取られ疲れきって、しゃがみこんで動かず、兵隊は綱を引張って立たせようと苦労していました。死んだ馬は近くに穴を掘って埋めていました。夜は部落で宿営です。旅団正面の敵は湯恩伯將軍の率いる中国軍で第三十一集団でした。平原の草原を通った時、脇道で三、四人の敵兵が迫撃砲にやられたのか、かたまって倒れ込んでいました。その死体に蠅が真っ黒にたかっています。近くに部落も無くただの草原に、蠅がこんなに多くいることが不思議に思えました。友軍の野砲隊の兵士一人が腹に大きな穴が開いて血だらけになって

死んでいるのを見ました。

京漢作戦が二カ月ぶりに終わって、再び任務の警備のため広水鎮に帰って、広水から東にある二郎店という地名の所で三カ月間、一個小隊で警備に就きました。その後、昭和十九年十二月まで曹長以下十五人で鉄橋分哨等鉄道警備に就いていました。武器は九二式重機と重擲弾筒を持っていました。それから後、砲陣地構築の命令があつて十字鍬や円びで作業にかかりました。その地面が硬くて難儀しましたがようやくある程度掘って丸太を組み、木の葉をかぶせて偽装して、小さな大砲を据えました。老河口飛行場から敵機が週一回、午後から飛来して米人の操縦士の顔が見えました。百キロの爆弾が落されましたが幸い不発弾だったので、農民にかつがせて大隊本部に届けました。

広水の近くの二郎店にあつた一個小隊の分哨に敵七百人が夜間襲来、二十三人が戦死、指を切つて火葬して内地に送還しました。当時、私は左手の親指が瘰癧にかかり、麻酔なしで切られ休業してしまいましたので助かったのですが、同年兵も十数人戦死しただけに、現

在でもこの傷を見ると当時を思い出します。四年兵は一人も死んでいないところを見ると、戦場の経験が物を言ったのでしょうか。

昭和二十年二月になると警備地区交代のため広水を出発、応山着、付近の警備に就きました。ちょうどそのころになると老河口の敵機飛行場を攻める第十一軍の作戦が始まり、これに呼応して第十一旅団が南から挟み撃ち作戦が始まりました。いわゆる、襄樊（ジョウハン）作戦が始まりました。

当時第十一旅団は第三十四軍に属し、第二十九師団（藤）の後衛として参加していました。そのころ大隊の中に一個小隊の挺身隊があり、黒い民服と、布靴着用で支那軍に変装し、銃を逆にかつき敵中に紛れ込んでゲリラ活動をやっていました。二カ月間の作戦ですら裏作戦だけに世に知られていません。

私の旅団は警備旅団なのに軍は三つも変わりました。第十一軍、第三十四軍と所属軍が変わり、終戦時には第二十軍に変わっていました。襄樊作戦が終わって応山に帰還して四カ月経ち、大隊無線が天皇陛下の放送

を受け日本の敗戦を知りました。

古い兵隊は「中支は負けていないのに何で降参したんだ信じられん」と騒いでいました。間もなく中隊長から、続いて大隊長から終戦の心構えについて話があり、やっと落ち着いたようです。このころの旅団長は南京下士候隊長だった加藤勝蔵少将にかわっていました。

応山の司令部に武器弾薬を集めて武装解除を自主的にしたので中国軍はいませんでした。

中国軍が来るまで何もすることがないので手榴弾を池に投げ込んで魚を獲ったり、銃で犬を撃って料理して食べましたが、赤犬なら美味かもしれないが白い犬はまずくて食べられませんでした。終戦後の食事は米に小豆を混ぜて炊くのですが、豆が生煮えで皆が下痢して大変でした。

九月二十一日応山出発、三十日孝感（漢口東北）の軍官学校の兵舎に収容され八カ月間過ごしました。収容所の看板は「第六戦区武漢行営日本官兵管理処」となっていました。米、野菜は十分で焚き物は考感飛行

場の芝を刈って使っていました。労役はなく武器弾薬の整理のため倉庫から倉庫へ運搬する程度の作業でした。

特に蒋介石の温情で日本軍は救われたと思います。兵隊は皆、感謝していました。

復員は上海から乗船するのに揚子江を船で下らず、陸路鉄道で北上、北支回りで徐州から南下して南京、蘇州を通過上海に到着。四月二十一日上海で駆逐艦「杉」に乗ったとき、将官は戦犯容疑で残され、旅団長が波止場まで見送りに来ていました。

上海港を出てから上海沖で二日、馬鞍群島沖で二日、鹿児島沖で二日間と計六日間を伝染病の予防のため停泊して、ようやく五月二十七日に鹿児島港に上陸しました。もし六日間の中に伝染病が発生すると神奈川県浦賀に回送させられることになっていたそうです。

鹿児島島の商業学校に入って費用や切符をもらって家へ帰りました。故郷への手紙は二年半の間、広水の教育隊にいる時ともう一回の計二回出しただけなので、留守宅では音信不通で心配していたところへ突然帰っ

たので、びっくりしていました。

復員してから元のステンレス工場へ戻りましたが、職場が変わって庄延作業という暑い仕事だったので一年ばかりで辞め、北海道炭鉱汽船のカムイ炭坑で一年八カ月働きましたが、炭坑の国家管理で月給が安くなったのとインキが凍る寒さに閉口して新潟に帰り、河川改修工事につきました。張付役に元少佐がおり「部隊長」と呼ばれていました。さすがに恰幅の良い人でした。

当時、地元の企業の信越化学でも戦後の混乱期だけに本工の採用は無く、季節工しか採用しないので困っていましたところ、ある人の紹介で名古屋の日本電工の下請け工場に勤めることになったのです。昭和二十九年四月でした。

嫁さんは名古屋の人をもらいましたが平成四年にガンで亡くして目下、独身の息子と二人暮らしです。私は身体だけは丈夫で、朝四時半起床、一時間歩いていきます。

新兵当時ビンは喰ったけれども、私はすぐ鼻血が

出るたちだったので、古年兵が驚いて叩くのを止めたので他の者にくらべると叩かれるのは少なかったと思います。

軍隊日記

武漢攻略戦前後

岐阜県 岩田義雄

私は大正七年一月七日、現高山市で生まれ、昭和十二年に現役志願兵として徴兵検査を受け、十三年一月十日、富山歩兵第三十五連隊留守隊に入営、一期検閲後の四月、中支派遣の第九師団の本隊に追及のため蘇州へ行き、警備と二期教育を受けました。

その当時、南京付近は完全占領し、いよいよ武漢（漢口、武昌）攻略戦の準備中でした。八月八日午前十時蘇州の兵営出発、午後七時、鎮江駅下車。十三日午後三時揚子江岸より乗船溯江。十八日午後二時、敵弾の飛ぶ中を九江に上陸、まさに敵前上陸でありまし